
言語の「衣服」としての文字にいかにして 思想性が宿るのか

—20 世紀初頭の全ドイツ文字協会の言説をめぐって

大倉 子南

1. 文字に魅せられた人々—全ドイツ文字協会について

ひとは、文字に固執することがある。言語を記録するだけの媒体にしか見えない文字に、言語そのもの以上に拘るのである。ドイツでは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて「文字論争 (Schriftstreit または Schriftkampf)」が起こった。ドイツの文字論争は、アルファベットをどの文字書体で書き記すかという書体に関する議論であった。ここで対立した書体はドイツ文字とラテン文字であり¹⁾、1911 年にドイツ帝国議会における議論の対象になった。文字の問題が帝国議会の議論の俎上にまで載せられたのは、なにゆえであろうか。本論文では、この時期にドイツ文字支持の側に立ち、論陣を張った「全ドイツ文字協会 (Der Allgemeine Deutsche Schriftverein)」(以下、略記時には「文字協会」とする)に焦点を当て、この協会の会員たちがそもそも文字をどのように認識していたのかを明らかにし、文字が国を挙げての議論になりうる、その理由をめぐり考察を行う。

文字協会の創立者は、アドルフ・ライネッケ (Adolf Reinecke, 1861-1940) である。ライネッケは、不必要な外来要素からドイツ語を浄化することで国民意識を強めようという趣旨で 1885 年に設立された「全ドイツ国語協会 (Der Allgemeine

1) ドイツ文字は、フラクトゥーア書体 (Fraktur) ともいう。日本では、「ひげ文字」「亀の子文字」などと呼ばれる。16 世紀にドイツ語圏で成立し、その後、その成立過程からドイツを代表する文字として人々に認識された。一方のラテン文字は、アンティカ書体ともいう。これは、ルネサンスの伝播と共にヨーロッパ各地に伝わった丸みを帯びた書体であり、18 世紀までにはドイツ以外の諸地域ではほとんどがこの書体を使用するようになった。17 世紀以降、ドイツではドイツ文字とラテン文字が併用された。その際、大衆文学やドイツ語の書籍にはドイツ文字が使用され、学術書やラテン語の文章にはラテン文字が使用された。

Deutsche Sprachverein)」(以下、略記時には「国語協会」とする)²⁾の会員であったが、この国語協会の中でも急進的な国語浄化主義者であった (Puschner 2001: 31 参照)。ライネッケは国語協会のベルリン支部設立に関わり、この支部から文字協회가 1890 年に新たに創設された。文字協会の活動目的は、ドイツ帝国外にいるドイツ人を含めたドイツ民族のあいだでドイツ文字を保持し、ドイツ語を書き表す媒体として通用させ、ラテン文字をドイツ語の領域から締め出すことであった (Hartmann 1999: 47 参照)³⁾。

文字協会の機関誌『ハイムダル—純ドイツ性および全ドイツ性のための雑誌』(„Heimdall. Zeitschrift für reines Deutschtum und All-Deutschtum“ 以下、略記時には『ハイムダル』とする)⁴⁾は、1896 年に創刊された。発行部数は 1910 年に 1200 ~ 1500 部であったのが、2 年後には 1500 ~ 2500 部となった (齋藤 2013 : 3 参照)。文字協会の活動はオーストリア・ハンガリー帝国のドイツ民族主義者の活動と連動しており、『ハイムダル』はオーストリアの活動をドイツ帝国に伝える橋渡しの役割も担っていた (Puschner 2001: 32, 齋藤 2013 : 4 参照)。

文字に魅せられた文字協会の会員たちが文字をどのように認識していたのかを明らかにするにあたって、本論文はこの機関誌『ハイムダル』における言説を中

-
- 2) Der Allgemeine Deutsche Sprachverein は、「全ドイツ言語協会」と訳されることもあるが、本論文では、「国語」としてのドイツ語を意識した言語協会という意味合いを強めるため、「全ドイツ国語協会」と訳す。この協会については Bernsmeier (1977: 371-373) 参照。全ドイツ国語協会は、1885 年にヘルマン・リーゲル (Herman Riegel, 1834-1900) によって設立された。国語協会の主たる活動は、ドイツ語の中に紛れている外来語をドイツ語化するという国語育成 (Sprachpflege) や国語浄化運動などであり、代表的なものに郵政大臣のハインリヒ・フォン・シュテファン (Heinrich von Stephan, 1831-1897) による郵便用語のドイツ語化がある。国語浄化運動では上からの改革が成功し、商業・工業・芸術および教会や学校教育の場面でも国語浄化運動は展開されたが、新しい語を定着させるのには困難も伴う。たとえばメニュー表のドイツ語化では、*Hühnerfricassée* は *Weißeingemachtes vom Huhn* に、*Bonbon* は *Zuckerle* または *Leckerle* にドイツ語化するというような試みが行われたが、ドイツ語化された語よりも外来語の表現の方が慣れ親しまれていたために失敗に終わった。
 - 3) 全ドイツ文字協회가 設立され、言語を扱う国語協会に対応する文字を扱う協会として活動を開始した。しかしながら、国語協会が文字問題をなおざりにしていることなどによって、両協会の関係が悪化した。その結果、ライネッケは国語協会に対抗する協会として、1899 年に「全ドイツ国語文字協会 (Der Allgemeine Deutsche Sprach- und Schriftverein)」を創立した。文字協会とこの全ドイツ国語文字協会は別組織であり、全ドイツ文字協会は 1899 年以降も存続している (Hartmann 1999: 49, 52 参照)。
 - 4) Heimdall は「ハイムダル」と記されることもあるが、ここでは竹中 (2004) と齋藤 (2013) に従い、ドイツ語の発音で「ハイムダル」と記した。

心に分析する。研究対象とする『ハイムダル』の刊行期間は、1908年から1911年の4年間である。この時期は1911年の帝国議会の議論に至る準備期とみなすことができ（Hartmann 1999: 32 参照）、ドイツにおける文字論争が最も激化した時期である。また、1909年は文字協会がラテン文字派に対抗すべく組織の再編成を告知した年であり、1911年はドイツ帝国議会における議論の対象になった年である。

2. 「文字は言語の衣服である」というメタファー

2.1 「ドイツ語の衣服」か「拘束服」か

文字協会機関誌『ハイムダル』に掲載された記事を読み進めると、文字が「衣服 (Kleid)」というメタファーで捉えられていることが目にとまる。例えば、次のような箇所がそうである。

外国人はまず例外なくドイツ語をドイツの衣服 (= ドイツ文字) によって学ぶ。しかし、もしわれわれがラテン文字で印刷した (ドイツ語の) 学術的な文献を提供するならば、彼らは全く形の変った語の格好に目が慣れるように、再び学び直さなければならないのである。(筆者訳) (Anonym, Zur Schriftfrage. In: *Heimdall* 1909: 93)

[...]

もはや君の故郷の衣服には何の価値もないと言われている、
今や「世界市民的」になるそうだ；
それが長きにわたって光り輝いていたことは、
ドイツの地から忘れ去られるということだ。(筆者訳)

(Otto von Pfister [Darmstadt], Zur Schriftfrage, „Die Deutsche Schrift.“ In: *Heimdall* 1911: 92)

ただ単に衣服ではなく、鎧(よろい)でもある
ゲルマンの言葉のためのドイツ文字；
誰がかのものをわれわれから奪おうとするのか、

それは死への道を開くことに手を貸している。(筆者訳)

(Ein Geheimrat und vortragender Rat im Justiz-Ministerium, Zur Schriftfrage. In: *Heimdall* 1911: 47)

最初の文では、ドイツ文字が「ドイツの衣服」と表現されている。また、二つ目の文では「故郷の衣服」となっているが、この文の題名は「ドイツ文字」であり、それによって *heimisch* という形容詞を伴った「故郷の衣服」が「ドイツの衣服」すなわち「ドイツ文字」であることを表している。最後の文に至っては、形容詞を伴わないで単に「衣服」という語だけが挙げられているが、それに続く文によってドイツ文字を指していると気づく。ここでは衣服だけでなく「ドイツ文字=鎧、甲冑 (Panzer)」という表現もみられ、ドイツ文字とラテン文字の対立を戦いと認識していると読み取れる。実際、この文が掲載された 1911 年はドイツでの文字論争が最も激化した時期であり、文字問題に関する記事は 1908 年からの 4 年間で最も多く掲載された。

一方のラテン文字は、次の発言にみられるように、ローマ化を強制する「拘束服 (Zwangs-Jacke)」であった。

ドイツ語がラテン文字で伝えられることは、非常に不適切である。ローマの文字はドイツ語を不明瞭にするし、私たちを私たちの言語から疎遠にし、理解を困難にする。ローマの法律が拘束服であったように、ローマの文字は私たちの言語にとって拘束服である。(筆者訳) (Anonym, Zur Schriftfrage. In: *Heimdall* 1909: 21)

文字協会は信仰、法律、芸術、言語、ついには文字の領域までもがローマ化されていることに嫌悪感を示しており (Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1910: 58 参照)、ラテン文字はドイツ語を不自由にし、ドイツ人を拘束し、常に異国の支配下に置かれているような感覚を与えるものであると捉えていた。

これらのメタファー表現が文字協会機関誌の記事においてみられるのは、出版業者であったグスタフ・ループレヒト (Gustav Ruprecht) が 1907 年に作成した小冊子「ドイツ語の衣服について („Über das Kleid der deutschen Sprache”)」の影響を受けてのものと考えられる。ループレヒトはこの中で、「ドイツ語にラテン文

字が使用される際に、外国人にどのような理解の妨げが生じるか」ということ
 の具体的な例を示しつつ、ラテン文字とドイツ文字を比較している (Ruprecht 1907:
 1 参照)。この冊子は、1907 年の『ハイムダル』6 号に掲載されたのち、1908 年 2
 号の中でも言及され、1908 年までの 2 年間で 5000 部印刷された。この冊子は
 1907 年には 4 ページからなる意見書のようなものであったが、1908 年に同じタ
 イトルで 9 ページからなる改訂版が出版された。その後、1908 年から 1911 年間
 に行われた帝国議会の議論⁵⁾を経たのち、翌年 1912 年に、80 ページからなる冊子
 として『ドイツ語の衣服—現在と未来におけるわれわれの書籍文字』 („Das Kleid
 der deutschen Sprache. Unsere Buchschrift in Gegenwart und Zukunft“) というタイト
 ルで出版された。

2.2 メタファーの基盤にある認識

レイコフ/ジョンソン (2013) によると、「メタファーの本質は、ある事柄を
 他の事柄を通して理解し、経験すること」(レイコフ/ジョンソン 2013 : 6) であ
 り、メタファーはひとの価値観や認識と密接に関わっている。メタファーの概念
 がひとの物事の認識を規定し、それによってひとは行動し、言葉を発する (レイ
 コフ/ジョンソン 2013 : 7, 32-33, 229 参照)。例えば、「この交渉は、そもそも出
 発点からして誤っていた」という表現では、「交渉」するプロセスが「旅」に見
 立てられて(「交渉は旅である」)、交渉にはさまざまに困難や苦労があるものだ
 (山あり谷あり) という認識が基礎に置かれている。では、「文字は言語の衣服
 である」というメタファーから、文字協会会員が文字についてどのような価値観
 ないし認識をもっていたと解釈できるであろうか。

「文字は言語の衣服である」というメタファーの基礎には、衣服がそうである

- 5) 1908 年 3 月 12 日の帝国議会において、帝国学校委員会 (Reichsschulkommission) から
 帝国議会に対してラテン文字への変更が提案されたが、これ以前にバイエルンの州
 議会で同様の趣旨の意見がだされたようである。この際、ラテン文字支持者であった
 中央党議員のフリドリッヒ・シュナイダー (Fridolin Schneider, 1850-1922) が議題として
 挙げ、この 2 日後の 1908 年 3 月 14 日には、同じくラテン文字支持者の自由国民党
 (Freisinnige Volkspartei) 議員のエドムント・シュテンゲル (Edmund Stengel, 1845-
 1935) とドイツ文字支持者であるドイツ革命党議員のフリードリヒ・ビンデヴァルト
 (Friedrich Bindewald, 1862-1940) が発言し、議論は活発化した。1909 年 2 月 15 日にも
 再度彼らの議論があり、その後 1911 年 5 月 4 日にこれまでで最も大きな議論がなされ、
 この議論を受けて、同年 10 月 17 日にドイツ文字の維持というかたちで文字論争は一
 旦の決着をみた。

ように、文字についても身体にふさわしいかどうかという点が重要であるという認識があるように思われる。この場合、身体に相当するのは言語である。ドイツ文字支持者は、当然のごとくドイツ語という言語にふさわしいのはドイツ文字であり、ラテン文字はドイツ語を正しく書き表すことができないと考えた。マルティン・ルター (Martin Luther, 1483?-1546) の「ラテン文字はドイツ語をうまく話すことの妨げになっている」(Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1908: 45) という考えや、文学者・言語学者であるカール・ヨーゼフ・ジムロック (Karl Joseph Simrock, 1802-1876) の「ラテン文字はドイツ語に合っておらず正しくドイツ語を表記することができないため、ドイツ語の発音自体に影響をきたし、ドイツ語を墮落させる」(Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1908: 82) といった権威ある人の意見を取り上げ、ラテン文字がドイツ語にはふさわしくないものであると主張した。

本来、言語は音声であり、目に見えず無形で、発した瞬間に消え去っていく。書き記すことによるのみ、発せられた言語は保存することができる。そのときに必要になるのが文字である。文字と言語を結ぶ概念はこの音の再現性にある。「文字は言語の衣服である」というメタファーは、言語という身体にふさわしくない衣服(文字)に着せ替えられてしまうと、言語の本来的な音そして姿が再現できなくなるという認識をもつように思われる。音を如何にして表現するのかに着目したとき、文字は単に言語を紙面に書き写す手段ではなく、その言語そのものを浮かび上がらせる媒体となる。

3. 特徴語から見た言説

3.1 コーパス言語学の手法

次に、文字協会の会員たちが文字をどのように認識していたのかを明らかにする目的で、文字協会機関誌における文字に関する議論に焦点を当て、どのような語が特徴的であったのかという観点から分析を行いたい。

文字に特化した議論を行った文字協会会員の言説の特徴を抽出するために、文字ではなく言語(語彙)の浄化に関して議論を行った国語協会会員の言説と比較する。これにより、文字に関する議論のキーワードを浮上させたい。この目的のために、文字協会の機関誌『ハイムダル』と国語協会の機関誌『全ドイツ国語協

会誌』 („Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins“以下、略記時には『国語協会誌』とする) に出現する語を、コーパス言語学的手法で比較していく。コーパス言語学とは「電子化された言語テキストの集成体であるコーパスに基づき、主として実証的観点から言語の諸特性を観察・調査・記述・分析する」(石川 2012 : 1) 方法論の総称のことであり、電子データとして集積されたコーパスを用いて、手作業ではできない、主観的に判断できないテキストの特性を実証的に分析していくものである(石川 2012 : 1, マケナリー/ハーディー 2014 : 2 参照)。コーパス言語学的手法によって、国語協会との比較における文字協会の語彙レベルでの特徴を導きだす。

分析のため、1908 年から 1911 年の 4 年間分の『ハイムダル』と『国語協会誌』のテキストを電子化した。文字協会のデータは 592 ページ分、国語協会のデータは 832 ページ分である。以下、「文字協会コーパス」、「国語協会コーパス」と呼ぶ。コーパスのトークン⁶⁾数は「文字協会コーパス」で約 57 万語、「国語協会コーパス」で約 72 万語であり、両協会合わせて約 130 万語となる。コーパス作成にあたっては、テキストをデータ処理した後に形態素解析ツール *TreeTagger*⁷⁾を用いて品詞分析をし、レマ化を行った⁸⁾。さらに、コーパス検索のコンコーダダンスとして *AntConc* (Windows 版 3.4.4)⁹⁾を使用し分析を行った。

特定の語の出現頻度を 2 つのコーパス間で比較したとき、片方のコーパスで顕著に多く出現している語のことを「特徴語」という(石川 2012 : 95 参照)。2 つのコーパスが言語的・内容的に類似しているのであれば語の頻度も類似するが、

6) 「トークン」とは、「テキストないしコーパス内において個々の語が出現する個別的事例」(マケナリー/ハーディー 2014 : 36) であり、延べ語数を指す。

7) *TreeTagger* のインターネットサイトは次のものである。<http://mmt1.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/tree-tagger/>

8) 通常、個々の単語はテキスト内において活用した形で登場することが多い。レマ化とはそうした活用した語形に基本形の情報を付加することであり、これによって個々の活用した形も含めて一つの語の頻度として数えさせることができる。たとえば、動詞 *kommen* がテキスト内では „*ich komme...*“ となっていたとしても、レマ化を行うことで動詞の基本形 *kommen* として認識される。また、*TreeTagger* でレマ化した語は、名詞の場合には基本形が *die, eine* のように女性形になる。詳しくは、マケナリー/ハーディー (2014 : 175) および石川 (2012 : 141) 参照。

9) *AntConc* は多機能コンコーダダンスに分類され、*AntConc* 内で単語頻度検索 (Word List)、特徴語検索 (Keyword List)、コンコーダダンス検索 (Concordance)、コロケーション検索 (Collocates)、単語連鎖検索 (Clusters) などの分析を行うことができる。(日本語の訳は、石川 (2012) に従った。)

特定の語が一方のコーパスよりも顕著に出現している場合、その語は一方のコーパスとの相違を明らかにする特徴的な語であることになる。この場合、検出結果は「当該テキストの言語的性質を要約したもの」（石川 2012 : 155）といえる。特徴語の顕著さは主観では判断できないため、統計値を基準として判断を行う（石川 2012 : 95 参照）。

この統計値の検定方法には、対数尤度比（log-likelihood ratio）やカイ二乗統計量（chi square value）といった基準を用いるものがあるが、本論文では対数尤度比検定を行った¹⁰。対数尤度比の有意水準（有意差の判断を誤る許容範囲の値）は、最も厳しい水準と言える 0.01% を採用した。この水準での検定は、検定の判断が誤りである可能性が 0.01% 以下のときであり、その判断の棄却値は 15.13 である。検定結果の値が 15.13 以上をとる単語がそのコーパスにおける有意な特徴語となり、コーパス自体の特性を表すものとなる。対数尤度比を用いた検定では、それぞれのコーパスの全体の大きさや出現頻度との関係で特徴語が決定される。したがって、ある語の出現頻度が仮に 2 つのコーパス内で近い値をとっていても大きな差がみられないようであっても、特徴語になる可能性がある。

3.2 文字協会の言説に特徴的な形容詞

ではまず、形容詞に注目して、「文字協会コーパス」と「国語協会コーパス」において対数尤度比が 15.13 を上回る特徴語をみてみよう。表 1 は、それぞれのコーパスの特徴となる形容詞の上位 30 位までをリストアップしたものである。「文字協会コーパス」の特徴語となる形容詞は、テーマとしてドイツに関わる語が 30 語のうち *germanisch* 「ゲルマンの」（第 6 位）、*alldeutsch* 「全ドイツの」（第 7 位）、*deutsch* 「ドイツの」（第 13 位）と 3 語あり、民族に関わるテーマの語は *völkisch* 「民族的な」（第 1 位）を筆頭に、*polnisch* 「ポーランドの」（第 2 位）、

10) カイ二乗検定では、「事例数が極端に少なくなった場合 [期待値が 5 未満]、信頼性が失われる」（マケナリー/ハーディー 2014 : 78）ことや、あらかじめ有意水準を定めていても「有意性検定を複数回行った場合、偶然確率によって、検定結果の一部が誤ったものになる」（マケナリー/ハーディー 2014 : 79）ことがある。また、カイ二乗検定ではデータが「正規分布（normal distribution）していることを前提する」（マケナリー/ハーディー 2014 : 79）が、対数尤度比検定ではデータの正規分布を前提としないため、今回の分析では対数尤度比検定を使用した。詳しくは、石川（2012 : 123）およびマケナリー/ハーディー（2014 : 78, 79）参照。

[表 1 両協会コーパスの特徴語 形容詞]

文字協会コーパス p<0.0001 トークン数:569804語				国語協会コーパス p<0.0001 トークン数:723717語				
単語(レマ)	対数尤度比	頻度(文字協会)	頻度(国語協会)	単語(レマ)	対数尤度比	頻度(文字協会)	頻度(国語協会)	
völkisch ●	926.56	770	54	1	allgemein	451.30	263	1206
polnisch ●	325.56	279	22	2	sprachlich △	247.52	54	428
tschechisch ●	320.24	225	6	3	französisch ●	152.81	127	494
katholisch ◇	264.17	200	9	4	hiesig	124.50	2	122
slawisch ●	192.58	165	13	5	fremd ●	102.23	170	503
germanisch ★	187.98	229	43	6	kurz	92.00	149	445
allddeutsch ★	151.23	129	10	7	bayerisch ★	88.27	0	76
sittlich	129.60	117	11	8	entbehrlich	82.31	4	94
römisch ●	129.54	213	61	9	üblich	75.88	30	168
österreichisch ●	124.55	229	74	10	mundartlich △	75.66	5	92
wirtschaftlich	103.79	121	21	11	häufig	74.93	47	208
jüdisch ●	97.70	90	9	12	Dresdner	70.85	0	61
deutsch ★	94.12	4969	5205	13	ursprünglich	65.55	42	184
geistig	93.20	199	74	14	überflüssig	62.44	15	112
evangelisch ◇	93.19	94	12	15	amtlich	50.83	103	285
russisch ●	73.99	117	32	16	juristisch	46.46	0	40
gewaltig	72.56	93	19	17	kaufmännisch	43.93	7	68
körperlich	72.25	85	15	18	ausführlich	42.96	7	67
politisch	62.40	131	48	19	geläufig △	42.83	8	70
furchtbar	48.75	38	2	20	richtig	42.49	157	364
gesinnt	48.63	59	11	21	einfach	42.08	100	263
religiös ◇	46.05	57	11	22	diesjährig	42.04	1	43
weltlich	45.91	28	0	23	gebräuchlich △	40.26	11	76
hoch	44.78	507	414	24	ebensowenig	39.81	1	41
wacker	44.66	75	22	25	italienisch ●	39.31	6	60
traurig	43.48	55	11	26	englisch ●	38.81	116	285
heilig ◇	43.37	131	63	27	gewiss	38.65	188	407
eigen	42.89	359	270	28	verständlich	38.44	36	133
stark	42.68	258	174	29	international	38.34	6	59
treu	42.68	112	49	30	ähnlich	36.99	95	244

* ドイツ関連：★ 民族関連：● 宗教関連：◇ 言語関連：△

tschechisch 「チェコの」(第3位)、*slawisch* 「スラヴの」(第5位)、*römisch* 「ローマの」(第9位)、*österreichisch* 「オーストリアの」(第10位)、*jüdisch* 「ユダヤの」(第12位)、*russisch* 「ロシアの」(第16位)がある。合わせて、ドイツ関連・民族関連の語は11語となる。民族に関わる語のうち、*österreichisch* までの6語は対数尤度比の値の順位ではいずれも10位以内に入り、上位に集中している。また、宗教に関わる語として *katholisch* 「カトリックの」(第4位) 以外に *evangelisch* 「プロテスタントの」(第15位)、*religiös* 「宗教的な」(第22位)、*heilig* 「神聖な」(第27位) といった語が挙がっている。それに対して、国語協会に特徴的な形容詞としては、言語に関わる語がでてくるほか、*französisch* 「フランスの」(第3位)、*fremd* 「異国の」(第5位)、*italienisch* 「イタリアの」(第25

位)、*englisch*「イギリスの」(第26位)といった民族に関わる語も出ている。これらの形容詞は文字協会には少ないことが顕著である。

3.3 文字協会の言説に特徴的な名詞

続いて、両協会の特徴的な名詞をみていく。次の表2は、特徴語の名詞を対数尤度比の値の高い順に並べたものである。「文字協会コーパス」の名詞の特徴語として、ドイツ関連、民族関連、宗教関連の語彙が多く出現している。ドイツ関連の語では、*Deutschtum*「ドイツ性」「ドイツ人」(第2位)、*Deutsche*「ドイツ人」(第11位)、*Germane*「ゲルマン人」(第25位)、*Arier*「アーリア人」(第27位)が挙がっている。とりわけ *Detuschtum* という語はドイツ文字支持者が恒常的に

[表2 両協会コーパスの特徴語 名詞]

文字協会コーパス	p<0.0001	トークン数:569804語				国語協会コーパス	p<0.0001	トークン数:723717語			
語(レマ)	対数尤度比	頻度(文字協会)	頻度(国語協会)		語(レマ)	対数尤度比	頻度(文字協会)	頻度(国語協会)			
Gruß	529.74	423	25	1	Wort Δ	984.60	442	2313			
Deutschtum ★	509.22	652	133	2	Fremdwort Δ	836.00	111	1221			
Schrift Δ	504.62	894	278	3	Professor	656.66	194	1280			
Heil	482.74	364	16	4	Sprache Δ	569.45	934	2777			
Volk ●	481.93	1510	743	5	Vorsitzende	416.39	1	369			
Reich	654.89	627	70	6	Oberlehrer	388.85	8	391			
Österreich ●	348.68	483	111	7	Ausdruck Δ	356.09	126	750			
Kirche ◇	255.34	284	45	8	Jahrgang	335.04	40	474			
Polen ●	222.77	188	14	9	Zweigverein	296.26	1	265			
Tscheche ●	214.65	174	11	10	Vortrag	283.29	80	542			
Deutsche ★	209.37	919	542	11	Bezeichnung Δ	249.78	30	354			
Staat	198.17	335	99	12	Goethe	239.76	1	216			
Land	183.54	478	208	13	Mundart Δ	229.83	46	385			
Million	182.41	171	18	14	Wörterbuch Δ	203.00	12	241			
Rasse	169.08	132	7	15	Vorstand	197.68	12	236			
Jude ●	167.85	128	6	16	Form Δ	195.20	154	613			
Folge	161.97	246	64	17	Zeitschrift	195.25	129	557			
Dank	160.99	354	135	18	Mitglied	163.20	153	565			
Slawe ●	155.29	123	7	19	Bedeutung Δ	162.38	116	483			
Gott ◇	153.83	234	61	20	Hauptversammlung	156.93	5	167			
Ungarn ●	150.00	201	44	21	Januar	151.66	2	146			
Welt	146.39	305	111	22	Februar	146.62	1	135			
Bündnis	142.57	93	1	23	November	146.62	1	135			
Bund	136.97	132	15	24	Vorname	143.68	4	150			
Germane ★	132.98	114	9	25	Oktober	140.88	1	130			
Politik	120.39	100	7	26	Aussprache Δ	139.54	21	212			
Arier ★	119.70	73	0	27	April	138.24	5	150			
Krieg	117.01	143	27	28	Satz Δ	138.16	59	317			
Macht	114.34	163	39	29	Sprachgebrauch Δ	135.80	2	132			
Religion ◇	102.11	79	4	30	Schritfführer	132.81	3	135			

* ドイツ関連 : ★ 民族関連 : ● 宗教関連 : ◇ 言語関連 : Δ

使用している語であり、ドイツ帝国議会での議論においても、ことあるごとにドイツ文字とこのドイツ性を関係させている発言が目立つ¹¹⁾。

民族に関する語に注目すると、*Volk*「民族、国民」(第5位)、*Österreich*「オーストリア」(第7位)、*Polen*「ポーランド」(第9位)、*Tscheche*「チェコ人」(第10位)、*Jude*「ユダヤ人」(第16位)、*Slawe*「スラヴ人」(第19位)、*Ungarn*「ハンガリー」(第21位)といった語が挙げられている。これらはほとんど、表3でみた民族関連の形容詞を名詞形になる。文字協会はこういった民族や地域に特別注目していたと考えられる。また、宗教に関する語では、*Kirche*「教会」(第8位)、*Gott*「神」(第20位)、*Religion*「宗教」(第30位)といった語がみられる。

また、文字協会の特徴語の上位に入っている挨拶の言葉である *Gruß*「挨拶」(第1位)と *Heil*「安寧」(第4位)は、文字協会機関誌において、文章の最後に „Gruß!“ や „Heil!“ あるいは „Heil Ihr!“ „Heil und Segen...!“ というかたちで使用されていることが多い。この „Heil!“ という呼びかけは、19世紀から20世紀にかけてドイツにおける民族運動や青年運動で頻繁に使用され、そういった活動の特徴的なものとして捉えられている (Schmitz 2000: 300 参照)。

一方、「国語協会コーパス」では、言語に関する語が文字協会に比べて多くみられる。表3の形容詞ではこうした単語は多くはみられなかったが、名詞では30単語中12語も言語関連の単語がでていいる。形容詞においては、いくつか民族関連の単語がみられたが、名詞では文字協会のように形容詞が名詞化されたものも上位にはない。

興味深いことに、国語協会の特徴語の29位と30位には *Januar* (1月)、*Februar* (2月) という語が挙げられている。通常、機関誌には何月号という記載が必ずあるはずだが、なぜ国語協会の特徴語となっているのであろうか。このことについて、文字協会を設立したライネッケが説明している。

われわれドイツ人は、われわれの起源的な慣習をローマ教会によって根絶、あるいはひどく歪めさせて不純にしてしまったし、ドイツ人の古い民族法はローマ法

11) ドイツにおける文字論争が最も激化した1911年の帝国議会では、ドイツ文字支持者から「ドイツ性の象徴 (ein Sinnbild des Deutschtums)」(Reichstag 1911: 6365C) という発言があった。彼らは、ドイツ文字がドイツ性を保持するために重要な役割を担っていると主張した (大倉 2017: 108-109, 112-113 参照)。

によって投げ捨てられて、われわれの豊富な氏名も、みすばらしいヘブライ、ローマなどの名前に代わって腐ってしまった。また、われわれの言語をわれわれは屈辱的に不純にさせて、辱め、汚した。われわれの固有の月や単位の名称をわれわれは罪深い民族的な忘我の境地において、つまらない外来の名前と交換して、本来のものをがらくたの中に捨ててしまった。こんな民族がドイツ人である！（筆者訳）（Reinecke 1909: 37）

ライネッケは、月の名称や単位を表す語彙がドイツ固有でなく外来の語彙となったことを「罪深い民族の忘我の境地（sündhafte Volks-Verlorenheit）」（Reinecke 1909: 37）とし、ドイツ語が屈辱的に不純になったと述べる。彼は外来語由来の月の名称や単位を表す語彙を嫌い、『ハイムダル』でも *Hartung*（1月）や *Hornung*（2月）といったゲルマン化した単語を使用した。そのため、国語協会の特徴語に、現在では一般的に使用されている *Januar* などの語が挙げられているのである。もちろん、国語協会でも月の名称に関するドイツ語化の議論が行われていたが¹²⁾、文字協会は国語協会よりも早く月の名称のドイツ語化を実践していたのである。

文字協会で取り上げられている国は、オーストリア、ポーランド、チェコ、ロシアなどで、民族ではこの他にスラヴ人、ユダヤ人がある。文字協会の協会機関誌『ハイムダル』の創刊号には以下のような記述がある。

ドイツ性の財産であるあらゆる生活分野でのドイツの民族精神の育成とともに、帝国外にいるわれわれの民族同胞、とくにオーストリア、ハンガリー、ポーランド、バルト地方、ベルギーの民族同胞が種族的な性質を保持し育成していくために、力を込めて粘り強く彼らを支持していくことが『ハイムダル』の主な課題となる。（筆者訳）（Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1896: 1）

12) 国語協会では、1900年に「月の名称をドイツ語化すべきでないか」について投票が行われてはいたが、20年後の総会でラテン語由来の月の名称および単位を表す語彙をドイツ語由来のものに替えることを決定した（Bernsmeier 1977: 375 参照）。

文字協会は、ドイツ帝国内にいるドイツ人（ドイツ民族）のみならず、上記の諸地域にいるドイツ民族について関心をもっていた。文字協会の特徴語となった国々や民族は、このドイツ帝国外のドイツ民族との関連で言及されている。

3.4 文字協会の言説に特徴的なテーマ

以上のことから、国語協会の言説との比較における文字協会の言説の特徴は「ドイツ」、「民族」、「宗教」という3つのテーマに関わる語が多いということができる¹³⁾。「ドイツ」と「民族」というテーマが文字協会にとって本質的であることは、『ハイムダル—純ドイツ性および全ドイツ性のための雑誌』という機関誌名からも推測ができる。この誌名は、北欧神話にでてくるヘイムダル（Heimdall、ドイツ語読みでは「ハイムダル」）に由来し、文字協会機関誌の表紙にはヘイムダルとルーン文字が描かれている。こうした北欧神話からの名前の借用は、民族主義的な団体や刊行物によくあることであった（竹中 2004 : 135 参照）。

『ハイムダル』の創刊理由は「ドイツ文字の保護」という文字に対する関心よりも、さらに大きな「民族的性質の保持」であった。彼らにとって、文字問題はドイツ性の保持という点で取り組むべき課題であった。こうしたドイツ民族の民族意識に関する課題は国語協会でも掲げられているが（Bermesmeier 1977: 371 参照）、両協会のコーパスにおける語彙レベルでの分析からは、文字協会の方が国語協会以上に「民族」的な視点からの言及を行っていることが明らかになった。フェルキッシュ（急進的な民族主義的）思想をもつ者にとって、1871年に成立した帝国は「大ドイツ」主義のまとまりを放棄したという意味で未完成の国家であったため（竹中 1995 : 4 参照）、彼らは帝国外に置き去りにされた人々に目を向け、他民族の脅威に晒されている人々のドイツ性を守るために活動を行った。文字協会もその活動の一端を担い、「文字に注視する協会」を意味する名を掲げながら、あらゆる民族主義的な協会や同盟の共同機関誌ともなっていた。1908年から1911年の『ハイムダル』に載せられた記事には、オーストリア・ハンガリー帝国におけるドイツ人を筆頭に各地域に分散しているドイツ人の状況のほか、19世紀

13) 「ドイツ」というテーマと「民族」というテーマは重なり合うところがあるが、ドイツ文字を支持するドイツ文字協会会員にとってのドイツ性の重要性から、「ドイツ」というテーマと「民族」というテーマを区別しておくことにしたい。

末から 20 世紀初めに盛んであった「フェルキッシュ運動」(竹中 2004: 22)¹⁴⁾や「生改革運動」(竹中 2004: 22)¹⁵⁾で扱われた禁酒や慣習、人種問題、宗教問題、ユダヤ人についての記述がある。このように、文字協会は当時のさまざまな協会同様に、ドイツのフェルキッシュ運動と軌を一にした活動を行っていた。そのため、「文字協会コーパス」では「オーストリア」、「ハンガリー」、「ポーランド」等の他民族を表す語彙が特徴語として挙がり、文字協会の特徴となっているのである。

コーパス分析によって「宗教」というテーマが文字協会にとって重要であると判明したことは、文字協会が宗教的な立場を明らかにしていたことと符合する。文字協会は、オーストリアのドイツ民族主義者と連携し、反カトリックの立場から「カトリックからの離脱」(齋藤 2013: 5)運動に積極的な姿勢をみせていた。これを裏付けるように、文字協会では、*Rom* (ローマ) のあとに *-ling* を伴ってローマ・カトリックの信者を *Römling* という語で表現することで、軽蔑的なニュアンスを与えている。それに *Schrift* が付け加えられると、文字におけるローマ信奉者、つまり「ラテン文字に肩入れする輩」となり、ラテン文字支持者を軽蔑的に表現した言葉となる。

ドイツ文字は価値ある財産、民族的な財産、多くの点でわれわれの民族に役立つ宝であり、文字のローマ信奉者 (ラテン文字信奉者) 連中 (Schrift-Römlinge) が破壊する宝でもある。これはわれわれがドイツ的忠実さにおいて保持したいと願うものである。(筆者訳) (Reinecke 1909: 37)

このように、文字協会は文字同様に宗教においても、ローマ的なものに敵対し、「脱ローマ化」を図っていた。この点は、第 2 章で引用した「拘束服」としてのラテン文字 (ローマ字) の特徴づけや 3 章 3 節で挙げたローマ的な語彙からの決別と関連している。

14) 「フェルキッシュ運動 (völkische Bewegung)」とは、19 世紀後半から 20 世紀初頭のドイツで盛んになった急進的な民族主義的運動である。völkisch という語をどのように訳すかについては異論がある。本論文では völkisch を強調するために、「フェルキッシュ」という訳語を用いる。

15) 「生改革運動 (die Lebensreformbewegung)」とは、菜食主義、裸体運動や禁酒運動などの活動の総称である。この訳語は、「生活改良運動」など他にもあるが、今回は竹中 (2004) に従った。

さらに宗教というテーマでいうと、文字協会は実に多面的であった。というのも、彼らはプロテスタント的な信仰に立ちつつも、フェルキッシュ思想から発した宗教にも傾倒していたからである。19世紀後半から20世紀初頭のドイツ・フェルキッシュ運動では、主にキリスト教をゲルマン化する「ドイツ的キリスト教信仰」、ゲルマンや北欧の神話を基にした「ドイツ的信仰」、アーリア人秘教「アリオゾフィー」が宗教思想として存在した(齋藤 2013:3 参照)¹⁶⁾。文字協会はドイツ的キリスト教信仰を基盤としていたが、他の宗教的志向も含んでいた。とくに1911年頃からドイツ的信仰の宗教団体が設立され、それと共に『ハイムダル』の記事にもドイツ的信仰の主張をもつものが増えていった(齋藤 2013:9 参照)。文字協会では、たびたびカトリックへの批判と新しい宗教思想への言及がなされている。それが、文字協会の言説の特徴語として宗教に関わる語が特徴的に多かった一因であろう。

4. コロケーションから見た言説

4.1 何が「民族的」「ドイツ的」であるのか

文字協会の言説における特徴的なテーマのうち、「民族」と「ドイツ」についてさらに掘りさげてみたい。*völkisch*「民族(主義)的」は表1, 2でみたように、国語協会との比較において文字協会に最も特徴的な形容詞であり、同様に *deutsch*「ドイツの」は13番目に特徴的な形容詞である¹⁷⁾。どのような名詞が、*völkisch*、*deutsch* という形容詞によって修飾されているのであろうか。ここでは、検索の中心語(今の場合 *völkisch* または *deutsch* という形容詞)とそれに結びつく共起語(今の場合は名詞)を検出する。このために、AntConc内のコロケーション検索を用いて、中心語の前と後(左と右)に任意の語数を設定した。これにより、その語数内で中心語と結びつく共起語とその頻度を算出することができる(石川

16) ドイツのフェルキッシュ運動での宗教の区分はいくつかの試みがなされているようであるが、齋藤(2013)では「ドイツ的キリスト信仰」「ドイツ的信仰」「アリオゾフィー」(アーリア人に焦点を当てた人種主義的な要素を基盤とし、20世紀前半にドイツやオーストリアで広まった宗教思想)の3つに区分している。

17) *deutsch* は、両協会ともに出現頻度としては形容詞の中で最も多い語である。文字協会コーパスでは約57万語のうち4969語、国語協会コーパスでは約72万語のうち5205語である。

2012 : 91 参照)。この検索では、T スコア (T-Score)¹⁸⁾ での検索を行った。検索条件を、中心語 *völkisch* または *deutsch* の直後 (右) にくる語 1 語として調べたところ、表 3 のような結果となった。

[表 3 両協会コーパスの「民族の」「ドイツの」の直後にくる名詞]

文字協会コーパス (直後1語)						国語協会コーパス (直後1語)					
völkisch			deutsch			völkisch			deutsch		
共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度
Empfinden	3.58817	13	Reich	15.53652	255	Bewusstsein	1.41297	2	Sprache	23.82264	598
Kreis	2.93876	9	Schrift	15.53460	257	※Tスコアが2をこえるものはなし			Wort	10.91206	150
Kampf	2.76196	8	Sprache	12.93716	180				Name	8.15067	80
Verein	2.51791	7	Volk	11.15609	139				Ausdruck	7.90165	73
Eigenart	2.42391	6	Schule	6.62020	50				Reich	6.21652	42
Selbstbewusstsein	2.23146	5	Name	5.62896	39				Volk	6.11399	41
Gliederung	2.22455	5	Kultur	4.99867	28				Unterricht	5.57259	33
Pflicht	2.19768	5	Gruß	4.89119	31				Wörterbuch	5.52850	34
Gedanke	2.19038	5	Sache	4.56185	25				Schule	5.35094	33
Sinn	2.17503	5	Kunst	4.55629	23				Bezeichnung	5.19892	32
Frage	2.14009	5	Art	4.53360	24				Mundart	4.75908	28
			Verein	4.52089	27				Art	4.64696	26
			Muttersprache	4.28694	20				Rechtschreibung	4.33347	21
			Blut	4.15255	19				Speisekarte	4.25649	19
			Ansiedler	4.12719	18				Ortsname	4.00807	18

文字協会コーパスでは、第 1 位の *Empfinden* 「感覚」から第 11 位の *Frage* 「問題」までの T スコアが 2 以上であり、有意な共起関係があるといえる。*völkisch* ともつとも強い共起関係にある *Empfinden* は、直訳すれば「民族的感覚」となり、これだけでは意味を捉えられない。実際のテキストをみると「(略) その結果、生き生きとした民族的感覚をもつ民族は、さらにローマ化に対抗する剣を手にとらなければならないのだ。(筆者訳) (Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1910: 58) というように使用されている。ここから「民族的感覚」とはおそらく「民族に属している感覚」= 「民族性」の書き換えであると考えられる。それに続く *Kreis* 「領域、集団」(第 2 位) という語も「民族的領域」あるいは「民族的集団」

18) T スコアとは、2 つの語の結びつき = 共起の有意性を図る統計的指標である。T スコアの値の高低は、「共起の有意性の強弱を示し」(石川 2012 : 129)、「一般に T スコアが 2 以上であれば、有意水準の 5% を満たし、意味のある組み合わせと解釈される」(石川 2008 : 110)。

という訳になるが、意味が捉え難い。*Gedanke*「考え」(第9位)や*Sinn*「感覚」(第10位)のような抽象的な名詞もみられるが、こういった抽象的な名詞は「民族的ななにか」を指し、「民族性」の言い換えとなっているように思われる。*Eigenart*「特色、特性」(第5位)にいたっては、まさに「民族性」を言い換えているだけである。全体的に *völkisch* は、このあと分析を示す *deutsch* の場合よりも抽象的な名詞と結合する¹⁹⁾。文字協会は *völkisch* という語を多用し、しきりに「民族性」を訴えていたが、その内実は曖昧なままであったように見える。

また、*Kampf*「戦い」(第3位)や*Pflicht*「義務」(第8位)は、民族的に考えなければならぬ深刻な問題があることを連想させる。文字協会では、文字論争を「自分の存在にかかわる自身の戦い (*ein selbhafter Kampf ums Dasein*)」(Reinecke 1909: 38)としている。この発言は、抽象的なドイツ人、ドイツ性ではなく、個々人に危機が迫ってきているかのような切迫感を与える。こうした切迫感が煽られることで、人々が文字論争を危機的な「戦争」と認識し、議論へと駆り立てられていったのかもしれない。

ちなみに、文字協会の設立に関わったヘルマン・フォン・プフィスター・シュヴァイクフーゼン (Hermann von Pfister-Schweighusen, 1836-1916) は *völkisch* を *national* に代わるドイツ由来の単語として提唱していた (Puschner 2001: 28 参照)。彼は 1897 年の『ハイムダル』の記事の中で *national* を使用することは恥ずべきであると述べ、代わりに *völklich* という単語を使用することもまた誤りであると主張している (齋藤 2013: 4 参照)。実際、1908 年から 1911 年の『ハイムダル』のテキスト中には、*völklich* という単語は一度も確認できなかった。

なお、国語協会コーパスでは、*völkisch* については 2 以上を越える T スコアが計測できなかったため、有意な共起関係にある共起語を見つけることはできなかった。

次に、*deutsch* に続く名詞をみていこう。第1位 *Reich*「帝国」、第2位 *Schrift*「文字」、第3位 *Sprache*「言語」、第4位 *Volk*「民族、国民」である。これらの単語

19) 文字協会の言説において *deutsch* 同様に多く言及のあった民族に関わる形容詞の中で、*österreichisch* は *Staat*「国家」、*Regierung*「政府」、*Bündnis*「同盟」という政治に関わる名詞との結合としてみられ、*polnisch* は *Bevölkerung*「植民」、*Seite*「側」、*Hand*「働き手」との結合がみられた。これらの名詞には、*völkisch* でみられるような抽象性はなく、それぞれの民族に対する文字協会の問題意識が表れているように思われる。

はTスコアが11を越え、第5位以下とは大きな開きがある。文字協会はその名のとおり、たしかにドイツ文字やドイツ語に多く言及していたが、加えて、「ドイツ帝国」や「ドイツ民族」といった話題も多く含むことがわかる。また、国語協会の言説の場合と比較すると、国語協会では文字協会よりも *Sprache* 「言語」(第1位)、*Wort* 「語」(第2位)、*Ausdruck* 「表現」(第4位) など、言語に関係した共起語が多くみられる。3章で特徴的な形容詞と名詞を抽出したときも、形容詞では *sprachlich* 「言語の」、*mundartlich* 「方言の」や *Wort* 「語」、*Fremdwort* 「外来語」などの言語に関する語が特徴語となっており、国語協会の言説は、その多くがドイツ語の語彙や表現の仕方を取り組むべきテーマとして扱っていたと考えられる。他方で、国語協会の言説において、*deutsch* 「ドイツの」と *Schrift* 「文字」と強い共起関係がないことは特徴的である。

4.2 どのような「文字」、「言語」、「語」であるのか

次に、言語に関わる名詞 *Schrift* 「文字」、*Sprache* 「言語」、*Wort* 「語」、に注目して、これらの語がどのような形容詞等で修飾されるのかを調べる。第3章の表2でみたように、*Schrift* は文字協会の名詞の特徴語第3位、*Sprache* は国語協会の名詞の特徴語第4位、*Wort* は国語協会の名詞の特徴語第1位である。国語協会の名詞の特徴語第1位の *Wort* と第4位の *Sprache* についても調べるのは、国語協会の言説との比較を意図してのものである。これらの3語それぞれを中心語において、その直前(左)にくる語1語で検索を行い、表4および表5のような結果となった。

文字協会の言説においては、*Schrift* 「文字」は *deutsch* (第1位) との「ドイツ文字」という結びつきの強度が圧倒的に強く、その次に *lateinisch* 「ラテンの」(第2位) がくる。その他、*gebrochen* 「屈折した」(第5位) はドイツ文字を表し、*rund* 「丸い」(第10位) や *römisch* 「ローマの」(第11位) はラテン文字を表すため、文字論争の対象となった二つの文字が強い結びつきをもって *Schrift* という語を修飾している。また、*Sprache* 「言語」も *deutsch* との結合、つまり「ドイツ語」が一番多いが、*unser* 「われわれの」と *fremd* 「よその」という対照的な語が第2位と第3位に入っていることや、*polnisch* 「ポーランドの」(第5位)、*englisch* 「イギリスの」(第6位)、*französisch* 「フランスの」(第7位)、*tschechisch* 「チェコの」

[表 4 文字協会の「文字」「言語」「単語」の前にくる形容詞・冠詞]

文字協会コーパス (直前1語)									
Schrift			Sprache			Wort			
	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度
1	deutsch	15.53460	257	deutsch	12.9372	180	die	6.94768	117
2	lateinisch	6.73225	46	unser	6.20264	43	keine	3.15237	11
3	unser	4.07623	22	fremd	4.06975	17	dies	3.14082	14
4	dies	3.56968	21	ihr	3.97700	22	eine	2.94230	19
5	gebrochen	2.99039	9	polnisch	3.77977	15	deutsch	2.87735	15
6	heilig	2.93004	9	englisch	3.70154	14	gütig	2.43999	6
7	klein	2.51494	7	französisch	2.94522	9	aner kennend	2.23329	5
8	vorliegend	2.41744	6	tschechisch	2.33063	6	andere	2.19066	6
9	eigen	2.21467	6	verschieden	2.15563	5	unser	2.11838	7
10	rund	2.20669	5	andere	2.01790	6			
11	römisch	2.08345	5						
12	mein	2.01107	5						

[表 5 国語協会の「文字」「言語」「単語」の前にくる形容詞・冠詞]

国語協会コーパス T-Score (直前1語)									
Schrift			Sprache			Wort			
	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度	共起語(レマ)	Tスコア	共起頻度
1	klein	3.12236	10	deutsch	23.8226	598	die	20.42370	777
2	sein	3.09310	19	die	11.4901	436	deutsch	10.9121	150
3	heilig	2.63644	7	unser	9.35539	99	dies	9.00031	102
4	dies	2.12384	7	fremd	8.12699	69	fremd	6.39498	44
5	die	2.10823	39	französisch	6.33396	43	eine	5.02741	84
				eigen	4.51965	22	neu	4.66087	28
				englisch	4.51017	22	französisch	4.58213	24
				ihr	4.43719	31	alt	3.74198	18
				andere	3.63039	20	zusammengesetzt	3.55588	13
				alt	3.35521	15	solche	3.50734	17
				lebendig	2.91298	9	andere	3.30279	18
				zwei	2.83583	10	eigene	3.25260	13
				neuhochdeutsch	2.43254	6	viele	3.05477	13
				verschieden	2.37666	7	folgend	2.97177	11
				romanisch	2.20821	5	englisch	2.70149	9

(第 8 位) といった他言語を表す語が多いことから、言語についての言及がある際には「ドイツ語」とこうした「外国語」を比較対照していたと考えられる。*Wort* 「語」については、「言語」同様に *deutsch* 「ドイツ」や *unser* 「われわれ」が有意な共起関係にある。*Wort* との強固な共起語としてたしかに *gütig* 「親切な」、*aner kennend* 「認められた」という語が現れているが、どちらも「親切なことば」

「賞賛のことば」という意味であり、外来「語」や「語彙」をめぐるものではない。それに対して、国語協会の言説においては、*Sprache*「言語」と *Wort*「語」で *deutsch*（「言語」：第1位、「語」：第2位）との結びつきが多い他に、*fremd*（「言語」「語」ともに第4位）と *französisch*（「言語」：第5位、「語」：第7位）が相対的に多い。つまり、国語協会では「ドイツ語」「ドイツ語の語」と「外国語」「外来語」「フランス語」「フランス語の語」がよく言及されているということになる。実際、国語協会によるドイツ語浄化は、ドイツ語の中に入り込んだフランス語由来の語彙を排除することを主たる目標としていた（Bernsmeier 1977: 371 参照）。また、国語協会では「文字」については、そもそも強い共起関係をもつ語が、冠詞類を除くと、*klein*「小さな」（第1位）と *heilig*「神聖な」（第3位）しかない。また、*heilig* と *Schrift* が結びつくと、「聖書」という意味になり、「文字」の意味合いでは使用されていない。

表4と表5を比較してみると、国語協会のドイツ文字に対する興味の低さが再確認できる。というのも、文字協会の言説では「ドイツの」が「文字」と結びつく強度が 15.53460 という高い値をとっているのに対し、国語協会では 0.98284 ときわめて低い（表5には含まれていない）。国語協会は、文字問題を基本的な活動の範囲外としており、協議内容として扱われることはまれであったので（Hartmann 1999: 49 参照）、共起語の分析結果にもそれが現れている。

文字協会の言説では、「文字」「言語」「語」と *unser*「われわれの」との結合が強固である。『ハイムダル』では、「ドイツ文字」という表現の前に「われわれの（*unser*）」、「民族の（*völkisch*）」、「受け継いだ（*überliefert*）」、「相続した、先祖伝来の（*ererb*t）」、「祖国の（*vaterländisch*）」、「大切な（*traut*）」という形容詞がよく用いられている。「われわれの」文字・言語・語という表現は、テキスト中で多用される「ドイツ」文字、「ドイツ」語、「ドイツ」語の語彙の言い換えである。*unser* を用いてドイツ文字、ドイツ語やドイツの語彙を表す表現方法は、とくに文字協会で多く用いられており、文字協会が自民族の認識を読み手に主張するために、意識的に使用した表現だと考えられる。文字協会では「ドイツ文字」、「ドイツ語」を「民族的な財産（*ein volkstümliches Gut*）」（Reinecke 1909: 37）とみなし、ドイツ文字を「われわれが先祖から受け継いだ民族の文字」（*Der Allgemeine Deutsche Schriftverein* 1908: 142）や「われわれの受け継いだ民族の文字」（*Der*

Allgemeine Deutsche Schriftverein 1909: 11) といった表現で語る。ドイツ文字がドイツ由来であり、民族的に正統な文字であることを強調するために、「われわれの」という語を多用したと解釈できる。

5. 文字と思想性

1890年から活動を開始した文字協会の目的は、ドイツ文字の保持によって、ドイツ帝国外にいるドイツ人を含めた広義の意味でのドイツ民族を一致させることであった。コーパスによる分析では、文字協会の会員が国語協会の会員よりも頻繁に「ドイツ」、「民族」そして「宗教」というテーマに関して語り、民族主義的な視点でドイツ文字について言及していたことが明らかになった。文字協会の会員たちは、このドイツ文字にドイツ語との一体性という更なる付加価値を与えることによって、ドイツの民族性を保つことを主張した。そのときに機能したのが、「言語の衣服」というメタファーである。

文字を「衣服」と捉えることは、文字というものに外面性を認めることである。言語の本質が音声であるとすれば、文字は付属物に過ぎないと考えられることはしばしばある。どんなに見かけを変えたとしても中身は変わらないように、文字が本質を伴わないものであるならば、どんなに文字を変えたとしても言語の本質は変わらないはずである。しかし、文字協会の会員たちは文字がまさしく外面的なものであるからこそ、文字を変えることで中身の言語の価値も変わると発想を転換した。文字協会の創設者であるライネッケは、自身の論文「われわれの民族文字について」(1909年)の中で「何がわれわれを民族としてのドイツ人としていのか」(Reinecke 1909: 37)と問い、「外面的なものによってわれわれの生活が構成されており、その中に本質が隠れていることがある」(Reinecke 1909: 37)と述べている。衣服、様式、芸術、慣習、文字などに現れ出てくるものは、その個々人の内面であり、民族の内面はこれらの外面的なものに映し出されて、他民族と区別するしるしとなっていく。ドイツ民族はこうした、すぐに目に留まる外面的なものによって「ドイツ民族」とであると区別される。ドイツ文字支持者たちは、彼らの生活を形づくり、体現する外面的な文字にこそ、ドイツ民族としてのアイデンティティが宿っていると考えたのである。こうして、「ドイツ文字はドイツ語の衣服である」という考えは、ドイツ文字擁護の重要なキー概念となった。文

字論争が帝国議会で議論された際には、右派政党はドイツ文字を支持し、左派はラテン文字を支持した。このように左派と右派に分かれて激しい議論となったのも、文字が内面を映し出し、内面にある思想性を露わにするものと捉えられたからであろう。

田中（1975）は、この外面的で本質ではないように思われる文字が「文化の紐帯」（田中 1975 : 177）となると述べる。

その外的な要素のなかでも、文字と語彙の共通は、諸言語の文法的構造のへだたりを乗り越えて、その言語の話し手をたがいに心理的に強く結びつける。

文字のもたらす視覚的印象は人々を結びつけるのに大きな力を発揮するだけでなく、それが人々を分け隔てる力も非常に強い。文字がなじみのないものであればあるほど、人々に異様さの感覚を強調する。逆にそれがいちじるしく異なる言語であっても、同じ文字で、同じ綴りのまま、書かれた語彙が印刷面にくり返しあらわれるならば、人はたやすく、自分と同族の言語であると思ひ込みやすいのである。（田中 1975 : 178）

ひとが文字に固執する最も大きな理由は、共通の文字がひとに共感ないし連帯感を与えることである。20世紀初頭、ラテン文字は実用的で国際的な意思疎通の手段としてヨーロッパ諸国を結びつけ、この文字を通して人々は「文化国民（Kulturvölker）」（Soennecken 1881: III）となり、文化を共有した。それに対して、同じ時期のドイツでは、国際性のないドイツ文字がドイツ民族を結びつけるものと考えられた。文字協会の会員がドイツ文字を「民族の文字」「われわれの文字」と繰り返し強調したのは、ドイツ文字こそがドイツ民族のうちで共有されるべき外面的なしるしだったからである。ドイツ文字がドイツ民族にとって「共通の財産」となることで、ドイツ民族が一つのまとまりを成すと考えた。このように、文字は特定の象徴性を持ち（田中 1975 : 179 参照）、その象徴性によって文化圏と強く結合し、精神的なつながりをもたらす（田中 1975 : 179 参照）。ここから必然的に、文字の思想性が派生する。

しかし他方でまた、文字を「衣服」と捉えることは、文字が着せ替え（入れ替え）可能であることを認めることでもある。ドイツ文字がドイツ語の「衣服」で

あることをドイツ文字支持者が主張すればするほど、他の衣服（文字）への代替が可能であることを明らかにすることになる。1911年の帝国議会での議論で、ドイツ文字支持者のビンデヴァルト（Friedrich Bindewald, 1862-1940）は、いみじくも「使い古されたシャツのように、ドイツ文字を棄てるのか？」（Reichstag 1911: 6377A）ということばを、反対派の議員に投げかけている。この帝国会議の四半世紀後の1941年に突如として、ナチ政権が「汎ヨーロッパ的、世界的である必要から」（高田 2011 : 193）ドイツ文字を廃止しラテン文字を採用し、文字を入れ替えたのは、文字が「衣服」であることがなせる、ドイツ文字の歴史の皮肉ということができよう。

参考文献

「書籍・論文」

一次文献

Der Allgemeine Deutsche Schriftverein (1908-1911): *Heimdall. Zeitschrift für reines Deutschtum und All-Deutschtum*. Berlin u. Leipzig: A. Hasert u. G.

Der Allgemeine Deutsche Sprachverein (1908-1911): *Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins*. Berlin: Verlag des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins.

Reichstag (1911): *Verhandlungen des Reichstags*. Bd. 266. Berlin: Norddeutsche Buchdruckerei u. Verlags-Anstalt. (この帝国議会議事録は、以下のインターネットサイトにて参照した。)

URL: <http://www.reichstagsprotokolle.de/index.html> (参照日 : 2017年11月29日)

Reinecke, Adolf (1909): Um unsere Volksschrift. In: *Heimdall. Zeitschrift für reines Deutschtum und All-Deutschtum*. Berlin u. Leipzig: A. Hasert u. G., S. 37-40.

Ruprecht, Gustav (1907): *Über das Kleid der deutschen Sprache*. Göttingen: Vandenhoeck u. Ruprecht.

Soenneken, Friedrich (1881): *Das deutsche Schriftwesen und die Notwendigkeit seiner Reform*. Leipzig.

二次文献

石川慎一郎 (2012) 『ベーシック コーパス言語学』 ひつじ書房。

石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト—』大修館書店。

大倉子南 (2017) 「ドイツ・ナショナリズムと文字論争—19世紀末から20世紀初頭における二つの『ドイツ性』—」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第21号、97～122ページ。

齋藤正樹 (2013) 「ヴィルヘルム期ドイツにおけるフェルキッシュ運動と宗教—雑誌『ハイムダル』における人種と宗教—」現代史研究会『現代史研究』第59号、1～17ページ。

高田博行 (2011) 「国語国字問題のなかのドイツ語史—なぜドイツの言語事情が参照されたのか」山下仁・渡辺学・高田博行 (共編) 『言語意識と社会—ドイツの視点・日本の視点』三元社、167～196ページ。

竹中亨 (2004) 『帰依する世紀末—ドイツ近代の原理主義者群像—』ミネルヴァ書房。

田中克彦 (1975) 『言語の思想 国家と民族のことば』日本放送出版協会。

マケナリー、トニー/ハーディー・アンドリュース (2014) 『概説コーパス言語学 手法・理論・実践』(石川慎一郎訳) ひつじ書房。

レイコフ、G./ ジョンソン、M. (2013) 『人生とレトリック』(渡部昇一他訳) 大修館書店。

Bernsmeier, Helmut (1977): Der Allgemeine Deutsche Sprachverein in seiner Gründungsphase. In: *Muttersprache*. Bd. 87, S.369-395.

Hartmann, Silvia (1999): *Fraktur oder Antiqua. Der Schriftstreit von 1881 bis 1941*. 2. Aufl., Frankfurt am Main: Peter Lang.

Puschner, Uwe (2001): *Die völkische Bewegung im wilhelminischen Kaiserreich. Sprache-Rasse-Religion*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Schmitz, Berning (2000): *Vokabular des Nationalsozialismus*. Berlin u. New York: Walter de Gruyter.

「インターネット情報」

Anthony, Laurence: Laurence Anthony's Website,

URL: <http://www.laurenceanthony.net/software.html> (abgerufen am 21.2.2017).

東北学院大学 TreeTagger、URL: <http://mmt1.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/tree-tagger/> (参照日: 2017年4月7日)。

(おおくら・すなん: 学習院大学人文科学研究科博士前期課程 修了)

Weltanschauliche Vorstellungen von der Schrift als „Kleid“ der Sprache

Die Diskurse des Allgemeinen Deutschen Schriftvereins zu Beginn des 20.
Jahrhunderts

Sunan Okura

In Deutschland gab es bis zur Mitte des 20. Jahrhunderts eine Schrift, die „deutsche Schrift“ genannt wurde, weil man sie als die eigene Schrift Deutschlands auffasste. In der Zeit der Zweischriftigkeit mit der lateinischen Schrift entstand eine Auseinandersetzung darüber, welche Schrift man benutzen sollte. Über diese Schriftfrage wurden vom Ende des 19. und bis zu Beginn des 20. Jahrhunderts viele Diskussionen, sogar im Reichstag, geführt. Das Thema in der vorliegenden Arbeit ist die Frage, warum man so heftig um die Schrift stritt. Der Forschungsgegenstand ist dabei die Zeitschrift „Heimdall. Zeitschrift für reines Deutschtum und All-Deutschtum“ (im Zeitraum von 1908 bis 1911) des Allgemeinen Deutschen Schriftvereins, der die deutsche Schrift befürwortete.

Der Schriftverein sprach über Schrift in der Metapher von „Kleid.“ Mitglieder im Schriftverein bezeichneten die deutsche Schrift als das „Kleid“ der deutschen Sprache: In dieser Metapher gilt die Schrift als Kleid und die Sprache als Körper. Inwieweit diese Ansicht verbreitet war, zeigt das Flugblatt „Über das Kleid der deutschen Sprache“ (1907) von Gustav Ruprecht. Diese Metapher war beim Schriftstreit eine gemeinsame Erkenntnis der Mitglieder des Schriftvereins. Andererseits wurde die lateinische Schrift als „Zwangsjacke“ (Der Allgemeine Deutsche Schriftverein 1909:21) für die deutsche Sprache bezeichnet.

Zur Beantwortung der Fragestellung dieser Arbeit werden Methoden der Korpuslinguistik angewendet. Damit kann man die Eigenschaften der Texte analysieren und man braucht kein subjektives Urteil zu fällen. Dabei soll diese Zeitschrift mit einer anderen, nämlich der „Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins“, verglichen werden.

Der Verein, der diese Zeitschrift herausgab, interessierte sich besonders für den Wortschatz. Der Forschungszeitraum ist hier ebenfalls von 1908 bis 1911. Um die Schlüsselwörter des Schriftvereins festzustellen, wurden zwei Korpora aufgestellt, nämlich das „Schriftverein-Korpus“ (ca. 57,0000 Wörter, von 592 Seiten) und das „Sprachverein-Korpus“ (ca. 72,0000 Wörter, von 832 Seiten), wobei die analytische Software AntConc (Windows 3.4.4) benutzt wurde.

Im Vergleich zum Sprachverein wird das Wort *völkisch* in den Texten des Schriftvereins als Schlüsselwort verwendet und auch Wörter über Völker wie *deutsch*, *polnisch*, *tschechisch*, *slawisch*, *römisch* und *österreichisch* usw. oder die Ländernamen sind kennzeichnende Schlüsselwörter des Schriftvereins. Außerdem lassen sich religiöse Wörter wie *katholisch*, *evangelisch*, *religiös*, *heilig*, *Kirche*, *Gott* und *Religion* auch als Schlüsselwörter finden. In Bezug auf die Religion benutzt man im Schriftverein oft das Wort *Römling*, welches eine verachtende Bedeutung hat. Das zeigt die Feindschaft dieses Vereins gegenüber der römisch-katholischen Kirche. Der Schriftverein wollte sich mit seinem religiösen Standpunkt von Rom entfernen. Als Fazit lassen sich drei Gesichtspunkte als charakteristisch für den Schriftverein angeben: Diese sind „deutsche“, „völkische“ und „religiöse“ Gesichtspunkte. Der Schriftverein setzte sich die „Deromanisierung“ zum Ziel und verfolgte dieses Ziel mit Konsequenz auf den Gebieten der Religion, des Lebensstils, der Sitte, der Sprache und der Schrift. Der Allgemeine Schriftverein hatte eine Beziehung mit der damaligen völkischen Bewegung und Lebensreformbewegung.

Aus der Perspektive der Kollokation lässt sich das Substantiv *Empfinden* als das Wort herausrechnen, das mit dem Adjektiv *völkisch* am dichtesten verbunden ist. Die Verbindung *völkisches Empfinden* bedeutet dabei m. E. so viel wie „Deutschtum“. Zur weiteren Charakterisierung des Substantivs *Schrift* wurden außerdem im Schriftverein die Adjektive *völkisch*, *unser*, *überliefert*, *ererb*t, *vaterländisch* und *traut* signifikant häufig gebraucht. Der Schriftverein behauptete, die deutsche Schrift sei im „völkischen“ Sinne richtig und wertvoll. Er wollte auch zeigen, wie wichtig die deutsche Schrift für die Deutschen ist.

Die Bezeichnung der Schrift als „Kleid“ der Sprache verrät die Einsicht, dass Schrift nur eine Äußerlichkeit ist. Der Gründer des Schriftvereins, Adolf Reinecke, erkannte denn

in seinem Aufsatz „Um unsere Volksschrift“ von 1909 an, dass Schrift eine Äußerlichkeit sei. Er behauptete: „Aus Äußerlichkeiten setzt sich unser Leben zusammen und hinter Äußerlichkeiten verbergen sich oft bedeutsame Wesenheiten.“ (Reinecke 1909:37). Die Anhänger der deutschen Schrift legten deshalb auf die Schrift Gewicht, weil sie in der Schrift eine Äußerlichkeit erkannten, die das „Deutsche“ gestaltete. Schrift ist in der Tat eine Äußerlichkeit, aber wir leben in einer Welt, die Äußerlichkeiten bildet. Wir zeigen unsere Innenseite durch Äußerlichkeiten wie durch Kleidung, Stil, Kunst, Sitte und Schrift. Schrift hat die Rolle, unsere Innenseite herauszukehren. Den Hauptgrund, warum man an den Schriftarten so hängt, liegt darin, dass die Schrift Sympathie oder Gemeinschaftsgefühl gibt. Im Europa zu Beginn des 20. Jahrhunderts verband die lateinische Schrift als ein internationales Mittel die einzelnen Länder miteinander. In Deutschland dachten die Anhänger der deutschen Schrift, dass die deutsche Schrift das deutsche Volk einigen sollte. Jede Schrift hat ihre eigene Symbolhaftigkeit und ist stark mit dem jeweiligen Kulturraum verbunden. Sie stiftet weiter seelische Zusammenhänge und vermittelt politisch-ideologische Vorstellungen.

Aber auf der anderen Seite, lautet die Denkweise, die sich mit der Metapher des Kleides verband, dass die Schrift für den Schriftverein eine Äußerlichkeit ist und sich umkleiden kann. Je mehr der Schriftverein diese Erkenntnis betonte, desto klarer wird, dass man die deutsche Schrift durch andere Schriften ersetzen kann. Dass das „Dritte Reich“ 1941 die deutsche Schrift plötzlich aufgab und die lateinische Schrift einführte, stellt eine – historisch ironische – Konsequenz der Metapher der Schrift als des Kleides der Sprache dar.